

〔研究論文〕

国際インターンシップの可能性の検討－中国でのインターンシップ－**那須 幸雄, 丸山 鋼二**

〔Article〕

Investigate the Possibilities of International Internship –Internship in China–**Yukio NASU, Koji MARUYAMA**

1. Introduction
2. A Case Study of Advanced Japanese University on Internship in China -Asia University-
 - 2-1. Abstract of “YUME College” in Asia University
 - 2-2. Chinese Learning in China by AUCP (Asia University China Program)
 - 2-3. Internship in Dalian City, China
 - 2-4. Pre and Post Curriculum for Learning and Internship in China
 - 2-5. The Performance of “Yume College” in Asia University
3. The State of Internship in Chinese Universities
 - 3-1. East China Normal University in Shanghai 華東師範大学 (上海市)
 - 3-2. Tongji University in Shanghai 同済大学 (上海市)
 - 3-3. Beijing Foreign Studies University 北京外国語大学
 - 3-4. Capital Normal University in Beijing 首都師範大学 (北京市)
4. Conclusion

Prof. Nasu and Maruyama have visited Asia University in Japan and visited four universities at Shanghai and Beijing in China to study how to apply for international internship. It may be effective to promote internship in China after binding up mutual partnership agreements on Chinese language learning with any Chinese university. Chinese university students go to internship in the fourth grade in many cases.

1. はじめに

現在、国境を越えた国際インターンシップ(いわゆる海外インターンシップ)は、わが国大学では頻繁に実施されている。ただ、本学湘南校舎のインターンシップは、国内での実習に限られており、海外での実習として実現したのは、学生の自己開拓のみである(これまで、自己開拓でタイの日本語学校、ミャンマーでのリゾートホテルで実習があっただけである)。

そこで、大学紹介による国際インターンシップを実現するためのノウハウを蓄積し、可能性への条件を探索するために、隣国中国でのインターン(日系企業を想定して)を念頭に置いて、現地調査することとした。

そのため、中国インターンを既に実施していて、実績のあるわが国の先進校1校と中国上海市・北京市に所在する4つの大学を訪問して、インタビュー調査を実施した(中国の4校は、本学と提携関係または連絡関係のある大学である。本学国際交流室から紹介を受けた)。訪問時期は、2013年3月である。

訪問先(中国の大学は、中国語を一部、日本語に置き換えている)

国内： 亜細亜大学国際関係学部

中国： 上海市 華東師範大学国際教育中心
同 際大学国際文化交流学院

北京市 北京外国語大学国際交流与合作処、同 中国語言文学学院
首都師範大学国際文化学院、同 外国語学院日語系、
同 資源環境与旅游学院、同 就職支援院

中国の大学にインタビューしたのは、中国での大学生のインターンシップの特徴を知るとともに、大学に中国語短期留学して、あと市内の在中日系企業で実習をする、ということが可能かどうか、確認するためである。外国企業へのインターンシップを実施するには、宿泊先施設の確保が重要な条件となるが、ホテルなどへの宿泊は学生の経済的負担を大きくするので、中国の大学に在学しつつのインターンシップが可能か否か、検討した。

ただ、中国の大学における(中国人学生による)インターンシップは、4年次において就職活動の一環として実施されており、欧米各国やわが国におけるように、大学2・3年次に、求職活動に先立って実施されるキャリア教育の一環とは性格が異なっている。勿論、日本人学生が中国において2・3年次在学中に日系企業で実習することは十分可能であろうが、インターンシップに対する理解の仕方が異なるということは、実習上、何らかの影響が現れる可能性がある。

なお、この研究は、2012年度の国際学部共同研究「国際インターンシップ導入へのノウハウ分析、好ましいモデル構築の研究」(担当者 那須幸雄、丸山鋼二)により実施した調査・研究の成果である。

2. わが国の中国インターン先進校の事例(亜細亜大学)

亜細亜大学では2001年(平成13年)度に構想を開始して「アジア夢カレッジ」計画を実施している。2004年度に第1期生を迎えて、当2013年度で10周年となる。プログラム開始の年に現代GP(Good Practice)のテーマ5「人材交流による産学連携教育」に採用されて、2年間の助成を受けた。

このプログラムには2つの柱があり、それは①留学・外国語教育、②キャリア教育・海外インターンシップ、である。1年次の時、このプログラムへの参加者を募集し、2年次後期に中国大連への留学および現地でのインターンに挑戦するので、いかに実習生の中国語の力を向上させるか、が重要である。

本プログラムの発端は、1988年に当時の衛藤学長のリーダーシップのもとに初の本格的留学制度である「亜細亜大学アメリカプログラム(AUAP)」が開始されたことにある。そのプログラムは2013年に25周年を迎えたが、その制度の上に中国プログラムを設計したものである。そのプログラムでの留学者数は、AUAPは多い年度で年700名、最近では年200名程度であるが、中国留学者数ははるかに少ない。

2-1. アジア夢カレッジの概要

「アジア夢カレッジ」科目体系は図のようになっており、1年次から4年次までの4年間にわたる、中国留学を含めた国際的プロジェクトである。キャリア形成を意識した4年間のプログラムであり、所属学部の講義と中国という2つの専門性の修得が可能である。まず専門分野での受講と基礎ゼミの演習を2年次前期まで実施し、2年次後期にはAUCP(Asia University China Program)による中国(大連市)留学およびインターンシップが実施される(インターンシップは4単位である)。中国の大学における中国人ルームメイトとの学生宿舍生活、日中企業(現地日本企業または中国企業。ほとんどは日系企業)のビジネス体験が実施される(インターンシップの実習期間は1か月である)。大連市の提携先大学では、①大連外国語学院留学(中国語勉強、中国の仕事と生活、知の探検—中国の伝統と文化—)、②自己テーマ研究・調査、③大連インターンシップ、の3つが実施される。

中国の提携大学との関係は、語学教育に大学が興味を示すか、学生をインターンシップ期間中も含めて受け入れてくれるか、の2点によって構築されている。

2-2. AUCPによる大連留学、中国語勉強

学生は留学期間中には自分のキャリア形成テーマを考えて、現地で得た情報を蓄積し、帰国後の3年次の「応用ゼミ」選択の参考とする。

留学中は中国大学宿舎での生活によって、24時間の中国語漬けが行われ、中国語会話のみならず、日本と異なる生活習慣、思考方法を体得し、異文化交流が可能となる。中国での滞在は1 Semester(2年次秋学期)であり、9月から5か月間である。

参加学生(派遣者)数は多い年に全学20名程度で、最近は10名程度の参加である(登録する学生数に対して、中国留学に行ける学生数は60～70%である)。参加する学部は法学部、経済学部、経営学部、国際学部に亘っている。AUCPでの大連留学には学生の参加費用一人48万円が必要であり、それはビザ、航空運賃、宿舍費、損害保険料等をすべて含んでいる。

当計画は全学共通であり、希望する者で努力すると参加可能である。

図. アジア大学におけるアジア夢カレッジのプログラム

	1年前期	1年後期	2年前期	2年後期	3年前期	3年後期	4年前期	4年後期
学部授業								
専門分野	フィールドワーク	基礎ゼミⅠ	基礎ゼミⅡ	AUCP 大連留学 & インターンシップ 大連外国語学院留学 ●中国語 ●中国の仕事と生活 ●知の探検 (中国の伝統と文化)	応用ゼミⅠ	応用ゼミⅡ	成果指導ゼミⅠ	成果指導ゼミⅡ
中国理解	中国キャリア開発入門Ⅰ 中国研究Ⅰ	中国キャリア開発入門Ⅱ	現代アジアの人と社会 現代アジアと中国			現代アジアとキャリアデザイン		
キャリアサポート	キャリアデザインⅠⅡⅢ	適職入門ⅠⅡⅢ	留学準備セミナーⅠⅡⅢ			自己テーマ研究・調査 インターンシップ	キャリアプランⅠⅡⅢ	国内インターンシップ
		中国語				中国語コミュニケーション		

(出所) 亜細亜大学パンフレット『アジア夢カレッジ—アジアで生きる力を身につける—』

AUCPの専任スタッフは、専任教員(企業連携、インターンシップ担当)、職員(「アジア夢カレッジ推進室」担当課長、派遣職員)である。

大連外国語学院留学では、上記のように中国語、中国の仕事と生活、知の探検の勉強がある。

(1)中国語： アジア夢カレッジを通じて、中国語の勉強が行われる。中国語の勉強は言葉の習得のみでなく、中国の世界との付き合いを組み込むことでもある。大連外国語学院留学中には、そこでの中国語授業の受講(能力によるクラス分け)が必要とされる。

(2)中国の仕事と生活： 大連外国語学院では中国語の授業と共に、この講義が開講されるので、受講する。講義では大連日系企業・機関の日本人駐在員、中国人社員による講義が実施される。大連経済発展の経緯や計画、外資系企業にとっての経済環境、大連市の生活・社会環境、日系企業の仕事についてなど、の理解が図られる。また中国・大連での基本的な人間関係、日本人の中国での外資系企業での仕事などについて学ぶことになる。受講者からレポートが提出される。

(3)知の探検(中国の伝統と文化)： これも大連外国語学院の科目であり、年度によって異なるテーマで、中国文化について10程度の講義が行われる(歴史、旅行地理、調理、太極拳、楽器などが含まれる)。留学生は、その中から最低2科目を履修する。講義や実習に参加して、期末レポートを提出する。

2-3. 大連インターンシップ

大連市での提携先大学は大連外国語大学の外国語学院であり、そこの学生宿泊施設(外国人学生用寮)に5か月の留学中、学生は中国人ルームメイトと共に寝泊りする。外国人学生用寮であるが中国人学生の宿泊が認められ、中国人の部屋代は大学が負担する。これによって、4か月の中国語授業を受け、その後、5週間(約1か月)のインターンシップを実施する。

大連市でのインターンシップの協賛企業・機関は2013年8月現在、36となっており、これまでの協力企業・機関は29である。

企業： 日本企業の現地会社(総合商社、食品会社、電機会社、損保会社、旅行会社、ホテル、法律会社—弁護士事務所—など)

機関： 領事館事務所、国際貿易機関など

日本企業だとそれなりに責任感をもってインターンができるので、実習先の多くは現地の日系企業である。受け入れ企業との信頼関係の形成が重要であり、それができていると、大学の担当者の交代にも対処可能である。

インターンシップは、1名～2名に分かれて、5週間の実習を行う(原則として1社1名である)。現場体験によって現地企業・機関の業務の内容を体得・理解するとともに、中国人社員の労働観を理解すること、業種や職種について具体的知識を得ること、仕事に対する責任感・自立心と対人交渉能力を鍛えること、が目標である。インターンシップ先の割り当ては、大学で本人の研究テーマと受け入れ先のニーズに基づいて実施している(卒業後の採用とは関係がない、という前提で)。

留学とインターンシップ報告会は帰国後、3年次前期に実施され(インターンの日系企業の人を招く)、その後3年次後期には国内インターンシップが行われる。夢カレッジ成果作品の総合的な発表会は、4年次後期に実施される。

大連での中国語授業は、提携大学で実施され、11月に中間テスト、12月に期末テストが実施される。学生には日本にいたとき、1年次後期終了時まで中国語検定3級の合格を目指す。またAUCP期間中に中国語コミュニケーション能力を修得し、AUCP終了・帰国後に中国語検定2級の合格をすることが目標として、掲げられている。

2-4. 中国留学前と留学後のカリキュラム

夢カレッジ全体の構成は、専門分野、中国理解、キャリアサポートの3つに分かれるが、それは全学的な取り組みである。

(1) 専門分野(ゼミナール)： 学部での専門教育はゼミナールが4年間一貫して実施される。その科目は、(1年次前期)フィールドワーク→(1年次後期)基礎ゼミⅠ→(2年次前期)基礎ゼミⅡ→(3年次)応用ゼミ(前期がⅠ、後期がⅡ)→(4年次)成果指導ゼミ(前期がⅠ、後期がⅡ)と名称が変わる。ゼミナールは1人の教員が4年間、担当する。

・基礎ゼミ： 1年次前期の夏季フィールドワーク、中国理解の中国研究Ⅰ・中国キャリア開発入門で学んだことを基礎に、中国への関心を深め、海外インターンシップに向けた基礎作りをする。基礎ゼミⅠ(1年次後期)では個別ゼミと合同ゼミを組み合わせ、日中間の政治・経済・社会関係の基礎理解を進め、基礎ゼミⅡ(2年次前期)では大連留学と大連ビジネス・インターンシップでの実習生としての心構え、異文化理解の姿勢修得、大連でのキャリア形成テーマ追求の準備が実施される。

・応用ゼミ： 「留学・インターンシップ報告書」をまとめ、報告する。また将来の学生の自分の夢の実現に向けて、キャリア形成テーマを追求する。また専門科目を体系的に履修する。

・成果指導ゼミ： アジア夢カレッジで学んだことを、1年間かけて成果作品として仕上げる。その後、「アジア夢カレッジ成果作品発表会」が実施される。

(2) 中国理解： この中国理解では、中国語をベースとして、現代中国に関する基本的な知識を身につけることが目指されている。(1年次前期)中国キャリア開発入門Ⅰ、中国研究Ⅰ→(1年後期)中国キャリア開発入門Ⅱ→(2年前期)現代アジアの人と社会、現代アジアと中国→(3年次後期)現代アジアとキャリアデザイン、と実施される。

・中国キャリア開発入門： 中国との関係で自分のキャリアを考え、学習姿勢を身につける。少人数のゼミ形式でキャリアについての基本的理解を行い、国内の地域、企業・機関をフィールドとして社会文化、経済、経営を学ぶ。夏季休暇中には国内の産業地域でのフィールドワークが行われる。夏季フィールドワークは、前期試験終了後、夏季休暇の最初の週に2泊3日の企業等訪問を実施し、観察とインタビューが行われる。10月中に報告書が完成される。また中国キャリア開発入門では、将来のキャリアに関する調査研究が行われて、中国と関係する仕事の可能性が検討される。

・中国研究Ⅰ： 1年次前期の中国研究Ⅰは入門講座であり、中国人、中国文化、地理環境、政治などが講義で実施される。

・現代アジアの人と社会： 2年次前期のこの科目は、「現代アジアと中国」とともに、大連外国語学院への留学と現地でのインターンシップを控えて、基礎的知識を修得するために実施される。「現代アジアの人と社会」では、現代中国人の生活、価値観の理解を深める(例えば中国人の思考法、生活習慣、地域特性、楽しみなど)。パートナーとして働き、また中国人と付き合ううえでの知識が伝えられる。

・現代アジアと中国： 2年次前期の科目で、中国経済、日中韓の経済交流、そこに見られる問題点などを多角的に取り上げる。テーマごとのレジュメ、新聞記事等が配布され、受講者全員が新聞記事、TV、雑誌記事などについて広く理解できるようにすることを目指す。

・現代アジアとキャリアデザイン： 帰国後、3年次後期に行われるこの科目では、①アジア、中国で活躍している日本のメーカー、商社、シンクタンク、金融機関、政府系機関等から外部講師を

招聘して実施される講義、②担当教員の講義・解説、が交互に実施される。それに基づいて学生は自分で、疑問、課題、可能性などを見つけて、講義1回ごとにレポートとして提出される。

中国語の授業については、週3回のペースで実施されている。

(3) キャリアサポート： アジア夢カレッジでは、4年間を通じてキャリア形成(就職支援を含む)を実施しており、そのプログラムは表の通りである。学生のキャリア形成にかかわる総合的なサポートが実施される。亜細亜大学はエアラインの全日空(ANA)と提携しており、マナー教育などで指導を得ている。

2-5. アジア夢カレッジの成果

このカレッジを受講した学生の就職率は、一般の学生よりもはるかに高い、ということである(実習先の日本企業に就職する者はごく少ないが)。それだけ苦労して、2年次後期のAUCPを体験し、中国の人とコミュニケーションできる自信と実力を身につけたからであろう。また、大学4年間の「アジア夢カレッジ」で一貫して中国語の上達、中国経済経営・文化・歴史などの理解、国境を越えたコミュニケーション力と考察力向上に努めるためであると考えられる。

このAUCPの特徴は、2年次後期を丸ごと、中国大連市の大学への留学に充てて、そこで4か月の中国語の勉強と約1か月のインターンシップが組み合わされていることである。中国留学とイン

表. アジア夢カレッジにおけるキャリア形成・就職支援
【プログラムコンテンツ】

時期	支援項目	ワーク/アセスメント等
1年次(前期)	スタートガイダンス(グランドデザイン)	グランドデザイン シミュレーションシート
	キャリアデザインⅠ(私の歴史を知る)	キャリアデザインガイドⅠ
	キャリアデザインⅡ(私の職業準備度を知る)	職業レディネステスト(VRT)
	キャリアデザインⅢ(私の職業適性度を知る)	一般職業検査(GATB)
	キャリアワークショップⅠ(夏季研修事前研修)	マナー研修、インタビュー研修
夏季研修	キャリアワークショップⅡ(働く現場を知る)	リフレクションシート
1年次(後期)	キャリアワークショップⅢ<前編>(職業探索)	職務適性テスト/フィードバック
	キャリアワークショップⅢ<後編>(職業探索)	職業探索(OHBY/Cマトリクス)
2年次(前期)	留学準備セミナー(留学の心構え)	アクションプラン シミュレーションシート
2年次(後期)	大連留学	留学日記
	帰国生フォローアップガイダンスⅠ(リフレクション)	アクションプラン リフレクションシート
	帰国生フォローアップガイダンスⅡ(自己分析)	ジャンプアップノート
	帰国生フォローアップガイダンスⅢ(履歴書)	ジャンプアップノート
3年次(前期)	就職支援スタートガイダンス(アクションプラン)	キャリアデザインガイドⅡ
	インターンシップ事前研修Ⅰ(実習)	ビジネスマナー研修
	インターンシップ事前研修Ⅱ(講演)	インターンシップ実習中の自己管理
夏季研修	インターンシップ(国内)	
	キャリアプランニング講座	
3年次(後期)	個別面談会Ⅰ	
	業界研究	
	協賛企業担当者による面接指導	
	学内企業説明会(協賛企業人事担当者含)	
	卒業生と語る会(夢カレ卒業生含)	
4年次	個別面談会Ⅱ	

(出所) 亜細亜大学資料

ターンシップの組み合わせがあって、中国での日本人学生のインターンシップが実施できている(インターン実習生は2年次である)。

インターン先の企業・機関はほとんどが日系企業とはいえ、後期全体を大連の提携先大学の外国人宿舎(寮)で寝泊まりし、中国人のクラスメートと会話できること、また実習先の企業でも、当然中国人従業員が多いであろうことから、いろいろな機会に中国語を使用できる。5か月の間の学生が負担する費用は、比較的に廉価であり、提携先の大学施設に宿泊できる、という点はその背景にある(市内のホテルに宿泊してでのインターンでは、学生の負担がさらに多額になるのでは、と思われる)。

亜細亜大学では、このプロジェクトを、当時の学長の発想により、全学的に取り組んでおり、しかも米国留学(AUAP)に続いて実施しているので、体験が積み重ねられている。全学での取り組みという点に特徴があろう。

3. 中国の大学におけるインターンシップの状況

本学(文教大学)と提携関係あるいは連絡関係にある中国の4つの大学を訪問し、その大学で外国人留学生の留学している学院、また観光教育を実施している学院を選んで、訪問した。留学生の学院では、そこでの教育内容、インターンシップについて伺った。観光教育を実施している学院では、中国人の観光教育が調査の対象となる。

その大学生が中国の企業・機関でどのようなインターンシップを実施しているか、また日本からの学生が大学に留学しつつ、現地企業・機関でインターンシップすることは行われているか、ご意見を頂いた。訪問に当たっては、あらかじめ現地の担当されている教員、職員の方に質問事項を提示して、訪問時のインタビューへの準備を頂いた。

訪問した大学ごとにインタビュー結果を提示するが、中国では一般に大学4年生が就職活動の一環としてインターンシップを実施されることが多い。それは就職との関係でインターンシップをとらえているためである。大学でインターンシップを科目として設定しているところ(ビジネス教育分野など)では、インターンは大学の単位となる。

3-1. 華東師範大学国際教育中心(上海市)

華東師範大学は、学生約2万名、修士課程241名、博士課程111名という大きな大学であり、留学生は433名(うち日本人89名)である。留学生は4年次においてインターン先を決めて、中国国内でインターン先を探すこととなっており、日本人学生は日系企業でインターン先を探すことが多い(4年次は約130名)。留学生は日本の他、韓国、モンゴル、カザフスタンなどから受け入れている(韓国人が多い)。

なお、同大学には、旅遊計という観光を勉強する学部もあるということである。

国際教育中心(国際教育センター)では対外漢語学院を運営しており、中国語、国際ビジネス中国語、英語の3専攻があり、うち国際ビジネス中国語の学生(留学生)は、上海でインターンを実施する。実習生は4年次で、実習先の企業・機関は学部から紹介を受ける。実習期間は約3ヶ月である。その間、学生は大学に来ずに実習することとなる。

ビジネス以外の中国語を専攻する学生はインターンをせず、翻訳・通訳などを目指す。

受け入れをしてもらった企業・機関には、学生は指導料としては必要経費を支払う(約1千円＝

約16,000円)。大学が企業を紹介するが、その企業数は総計500社に上っている。

企業の受入れ実習生数は、企業で決定するが、1社1名が多い(多いところでは5名・10名を受け入れるところもある)。

その他、国際ビジネス中国語の学生は、3年次にオーストラリアの大学に留学する機会があるが、その際、3週間程度のインターンを体験する、という機会がある。オーストラリアに行ったのは、最近では7名とのこと。

上海市内での学生のインターンシップについては、大学内には担当部門はなく、学生からの連絡を受けるのみである。学生の募集や実習中の管理は、教員がしている。

中国では大学生のアルバイトが一切禁止されており、そういう形でしか学生は企業に接触できない。企業からは、実習生に昼食と交通費が支給される。

その他、所属学部によっては、インターンシップが必修または選択で設定されている学部もある。なお、中国人の学生で中国語の教員を目指す者は、高校などでインターンする(日本の教育実習のことであろう)。

3-2. 同済大学国際文化交流学院(上海市)

同済大学は1907年設立で、理工学、医学を含めた9つの専門分野をカバーする総合大学である。特に交通工学では先端に立つ理系に特徴のある大学で、ドイツの大学との提携を強く推進している。「中徳学院」という建物があり、ドイツ人の留学生が目立っている。

国際文化学院に所属する留学生は、約700名以上である。学院は国際文化学院本科(4年制)があり、1学年25名で100名が所属している。また、外国人留学生のために中国語教育を行う「外国留学生予科部」(期間1年間)、さらに短期の中国語コースを中に持っている。予科で中国語を学んだ学生は、その後、同済大学或いは他の大学に進学することになる。

本科学生は、経済貿易コースを実施することになる。卒業後はいったん帰国するが、中国での業務に就職することを目指す。

留学生の国籍は多岐に分かれており、日本、韓国、カザフスタン、トルコ、ロシア、アフリカ各国などから受け入れている。ただ、ヨーロッパ人の留学生がかなりおり、中でもドイツ人が多い(大学の理工学での提携による)。

同済大学のインターンは、中国で普通に行われているように、学生の自己開拓である。大学全体で、インターンシップを大いに実施しており、大学全体で何百人という学生が実習している、ということである。実習場所は多くは上海の企業であるが、上海外の企業などもある。

大学におけるインターンの単位は、基本タイプとして、6週間(1.5か月)で6単位となる。中には4か月の実習をする学生もおり、それは10単位となる。このように期間に応じて、単位数も増える制度が採用されている(長期の期間では、1年間のインターンをする学生もいる)。

国際文化学院本科においては、インターンシップが必修となっており、6週間で6単位が取得される(大学から求められるのは、5週間、100時間の実習である)。このインターンを実習しないと、本科を卒業できない。実習先の企業は、上海市内にあるホテル、旅行会社、金融機関、など全て中国におけるトップ企業が対象となっている。中には国際部門で実習するケースもある。実習年度は3年次であり、中にはドイツ人など4年次になってドイツ本国で実習に行く人もいる。

学院では、インターンシップの事前研修、事後研修などのカリキュラムは持っていない。実習先は学生が自己開拓して、大学の推薦を受ける。実習時期は、夏季休暇または semester 中である

(セメスター中だと、週に1-2日程度の実習をして、大学にも通う)。

インターン先から交通費や昼食をもらうが、謝礼は支払われない(一部、翻訳会社などで、業務をすることによって謝礼が出ることもある)。

本科学生の居住場所は、一部は大学の留学生宿舎で、一部は学外のアパート等である。学内にはキャリアセンターがあり、学生の就職援助を実施している。

この大学と提携を行えば、外国人宿舎が利用できるとのこと。現在、この大学はドイツ、イタリア、日本の4大学と提携している、ということで、日本の大学は桜美林大学と立命館大学である。これらの大学は、同済大学と交換留学の契約を行っている(桜美林大学は、同済大学の孔子学院と提携して、2年次～4年次の3年間、中国留学を行っている、とのこと)。

3-3. 北京外国語大学(北京市)

この大学は各種の外国語の勉強を行う。全体の学生数は約7千名である。中には18の学院および学部がある。

中国語言文学学院(The School of Chinese Language and Literature)の学生は1,500名であるが、うち外国人留学生が1,100名、中国人が400名である。

国際ビジネスを勉強する「国際商学院(The School of International Business)」の学生は800～1,000名程度がいる。インターンシップを実習するのは、主としてこの国際商学院の学生である。

インターンの単位は2週間2単位(4週間4単位)である。実習生は4年次である。日本人留学生もインターンに行く。実習先は、大学が紹介することは少なく、実習生が自ら見つけることとなっている。

3-4. 首都師範大学(北京市)

首都師範大学では4つの部門を訪問し、またインターンシップ経験者の学生にもインタビューした。そのインタビュー内容および頂戴した資料から、同大学のインターンシップ制度について、述べることにしたい。

まず、この首都師範大学は、1954年創立の師範系(教員養成系)の総合大学である。中に20の学院・系がある。キャンパスは7つあり、うち1つ(北京市郊外にある)は、1年次対象の基礎学部が所在している。

学生数は29,100名余で、専任教員は1,300名以上いる。国際交流については、29か国・地域の161大学と交流協力関係があり、2006年～2012年春までに延べ1,258名の本科生・院生を海外に派遣している。一方、外国からの留学生受け入れについては、毎年、約2,500名を同大学で受け入れしている。

首都師範大学は、日本の和歌山大学、山口大学と提携しており、双務提携なので、日本からの留学生も来ている(現在、3名)。北京の小学校・中学校では、本学卒業者は就職がしやすい(系統がある)。北京市のもう一つの教員養成大学である北京師範大学の学生は地方から多く学生が来ており、戸籍の制約から、どうしても首都師範大学卒業生が多く北京の小中学校の教員に就職することになる(中国では、戸籍の場所によって、就職できる地域に制約がある)。

(1) 外国語学院日本系(日本語系)

外国語学院では日本語、英語、ロシア語、ドイツ語、フランス語、スペイン語の6系統がある。

ドイツ、フランス、スペイン語に人気が高く、日本語はそれに次ぐ人気があるとのこと。

日本系の定員は40名である。修士課程は10名、博士課程は2、3名がいる。

2年次または3年次の時、学生は必修として、日本留学を行う(学生の選択で、2年次でも3年次でもよい)。期間は1年であるが、経済的に苦しい者は半年でも構わない。日本の留学先は、京都市の大谷大学、長崎外国語大学がある。その2大学にそれぞれ17—18名が留学する。大谷大学には寄宿舎があり、宿舎を利用できる(使用料は半減する)ほか、奨学金もある。長崎外国語大学は、3名位は無料で迎えてくれる。留学中はアルバイトをするように、学生に勧めている。

また各大学に亘る中国大学生訪日団に加わって、日本の各地を訪問し、企業などを見学するという制度もある(参加学生は、大学からの推薦を得て、選抜される)。

3年次からの方向として、日本語・日本文学、社会と文化、通訳(翻訳を含む)の3コースがある。

4年次には就職活動の一環として、実習(インターンシップ)があり、4単位である(必修科目ではない)。期間は4週間(1か月)で、外国系企業などは学院の教員に実習生の紹介を依頼してくる。

実習する企業と大学は場所的に離れていることが多く、就職活動の一環として実施され、また単位にもなる。日系企業のインターンもあり、かつては給与が出ていたが、今は無給が多い。学生は企業と直接、実習の契約を結ぶ(大学は事後報告を受けるだけで、契約に直接関与しない)。実習のための事前・事後の研修、体験報告会はないが、終了後に学生がレポートは提出する。ただ、4年次前期に「外事礼儀」、後期に「就職指導」という必修科目はあり、教員がマナーや就職活動の心得を指導している。

実習(インターン)は学生の間で、就職活動の前触れととらえられており、4年次のほとんどの学生(80%程度)がインターンをしている。

インターン実習先への就職については、あまり高くない、とのこと。著名企業や外国系企業を狙って実習を希望する学生が多いので、結果として中々採用されない。なお、日本系の学生40名中、10名は卒業後、日本、米国などの大学院に留学している。

さらに日本系の4年次学生2名に面会を許可されたので、そのインタビュー内容を記載したい。男子・女子各1名である。

・男子学生： 3年次(2012年)に中国大学生訪日団に加わって、東京、鎌倉、浜松、大阪、京都などを訪問。企業見学も実施。2012年の年末2か月、IT企業でインターンを行った。実習は求人ネットを利用して自己開拓した。実習部署は人事部門で、週に2—3日、実習。交通費、食費、工賃(給料)を受けた。

・女子学生： 3年次の1年間に日本の長崎外国語大学に留学した。学費・寮は無料で、さらに奨学金も得ている。インターンは4年次(2012年)11—12月の2か月、週3日ほど、外国語関係の出版社で実施している。この企業は北京外国語大学の関連企業である。開拓は自己開拓であった。食費と工賃(給与)をもらっている。実習部署は、外国語トレーニングのアシスタントであった(当人も将来はトレーナーを希望)。4年次前期に「外事礼儀」、後期に「就業指導」の必修科目を受けた。

(2) 資源環境与旅游学院

ここには4つの分野があり、それは地理科学専攻、地理情報システム専攻(地理情報システムの勉強)、旅游管理専攻(旅行管理の勉強)、遥感科学与技術(遠隔探査の技術勉強)である。この中で地理科学専攻は1954年設立で最も古くからあるが、自然地理、人文地理、経済地理、地理教育を基

礎として生態環境を勉強する分野である。また旅游管理専攻(定員30名)は旅行管理・旅行企画の勉強であって、他の専攻が自然科学系に属する中に、観光に関わる旅行分野が含まれているのが、興味深い。即ち資源環境与旅游学院では、旅行管理、旅行企画、旅行資源に関する専門人材の育成を、他の資源管理と共に実施している。

この旅游管理専攻は学生の実践技能と企画立案の才能の育成を目的としており、大学と旅行会社の協同による授業実施もある。また、英国の大学1校、ドイツの大学1校と単位互換契約を結んでいる。毎年、卒業生の10～15%が欧米、オーストラリアを中心に海外留学を実施する。

この専攻を修了した学生の就職先としては、旅行業に関係した企業、行政などに就職している。人材の供給が需要に追いつかない状況とのことである。他の3専攻もそうであるが、就職100%である。旅游管理専攻の就職先は、旅行会社、中学・高校教員などで、旅行業が40%を占める。その他企業としてはシーメンス中国有限公司、GE通用電気医療集団、アップル商業貿易(北京)有限公司など、外資系の就職者がいる。中国企業では、北京銀行、北京テレビ局、北京悦康薬業など。旅行関係では8名が就職した。英国サリー大学国際ホテルマネジメント学科に留学した者も1名いる。

旅游管理専攻では実習(实践教学)を実施しており、これがインターンシップに近い。必修で14コマ・29単位である(卒業までの必要な172単位の17%相当)。その中に「体育・健康と就業」という授業、軍事教練、学術講座(卒業論文を含む)があつて、それらはインターンと関係がないが、実習(フィールドワーク)もある。

実習(フィールドワーク)には旅行地図製図実習、旅行景観実習、人文地理実習などもあるが、旅行社管理実務(6セメ、36時間、2単位)、旅行管理実習(8セメ、72時間、4単位)は、わが国でいうインターンに相当する。

- ①旅行社管理実務(2単位)： 3年次後期の科目。事前に2～3回の講義を受けた後、半日、旅行会社を見学する。
- ②旅行管理実習(4単位)： 4年次後期に冬休みを含めて1か月をかけて行う。学生が自分で実習先を探し、会社で実習する(旅行会社やその他の観光業界の企業で行う。銀行なども可)。学生は交通費、食事代を受け取る。大学では事前研修、事後研修、体験報告会などは実施しない(企業でもしない)。所定の評価表に企業担当者に記入してもらって、大学に提出を受けて、成績評価する(レポート等はない)。学生の自己評価も提出してもらう。

このように旅游管理専攻では、観光プランの企画、科学的な研修を重視しており、ホスピタリティの教育は、まだそれほど重視していない。中国の大学で最初にホスピタリティを重視したのは天津市の南開大学であり、キリスト教系の大学とのこと。ホスピタリティは、中国では好客、懇懃(いんぎん)と称するようである。

(3)就職支援院

師範大学ではあるが、師範系の学生が40%、非師範系が60%となっている。師範系は学校の教員を目指し、非師範系はそれ以外の一般の企業就職を志す。

この就職支援院では、学生の就職支援およびアルバイトの指導を実施し、実習(インターンシップ)は、教育系の教員が当たる。

就職関係の講義としては、まず大学生1年次の時、就業指導の授業があり、大学生としての就職

に向けた心得を伝える。さらに2年次では「職業・能力拓展」、「創業」という選択科目があり、各1単位である。必修科目はない。

就職活動月間は、4年次の9月であり、師範生と非師範生を分けて講座を設けており、就職するための指導を開始する。以降、卒業まで就職指導に当たる。またその一環として、学生の会社・工場見学なども実施する(非師範生対象)。また座談会もあり、企業の人や中学の教員が話をする。非師範生向けには外国企業の担当者が会社紹介するものもある。

卒業生の就職先としては、小学校・中学・高校、予備校(中国では安博と称する)、IT企業などの各種株式会社がある。学生の希望職種・業界などの調査は就職支援院では行わず、学部・学科が担当して、企業の紹介などを行う。師範学生の就職活動については、教員資格の取得、大学の教職担当者との面接から始まる。教育実習は、各学部で担当している。

4. 結論

中国の大学では、インターンシップは普及しているが、それは就職活動の一環として実施するので、4年次後半に設定されることが多い(中には同済大学国際文化交流学院のように、3年次で実習を行うケースもある)。ビジネス系の学部・学科では、大学で実習の科目が設定されており、大学から単位が与えられる(必修のケースもある)。科目は「インターンシップ」とは称さずに、実習と呼称している(首都師範大学の資源環境与旅游学院 旅游管理専攻の「旅行管理実習」など)。

今回、留学生の留学先の学院や観光教育を担当する学院を訪問したが、外国人留学生、中国人学生とも、特にビジネスに関係する学部・学院では、熱心にインターンシップを行っている。

学生は自分から実習先を探すことが多く、大学から紹介するケースもあるが(華東師範大学、首都師範大学の例)、それは少ないようで、学生が自分で見つけるようになっていることが多い。大学ではインターンシップの事前研修、事後研修、体験報告会を実施しない(就職指導の一環として、マナー訓練や就職活動の心得の勉強はしている)。また企業との実習契約は、大学が行わず、学生が実施する。学生の評価は、学生の事後評価を受けて、受け入れ先からの評価+学生の自己評価による。

こうしたバックアップ面での対応策は、中国の大学ではまだ十分とは言えないであろう。給与については、受け取っているケースがあり、無給の場合もあるということだが、もらっていけないという規定はない(その点は、米国のインターンに似ている)。

このように、中国でのインターンシップは、就職に関係して実施されるケースが多く、4年次での実習というのは、その関係であろう。大学での観光系学部・学科でのホスピタリティ教育はまだ十分、浸透されていない(インタビューの時、ホスピタリティ・マネジメントについて伺ったら、その意味を理解して下さらなかったケースもあった)。

日本から留学生として日本人学生を派遣する場合、どうしても提携関係を利用して、中国で半年程度留学し、中国語の勉強をする必要がある。亜細亜大学のアジア夢カレッジ(AUCP)はそれを立派に実現しているケースである。

文教大学は中国北京市、上海市の4つの大学と提携または連絡関係にあるが、越谷校舎文学部中国文学科においても、その提携関係を十分活用していないのが現状である。

提携関係の必要性は米国やオーストラリアでの英語を使用したインターンシップであっても、同じようなことが言えるであろう。日本人学生の英会話、ビジネス英語での読み書き能力は、多くの

場合、十分とは言えず、どうしても現地の大学(或いは専門学校)で事前に英語能力や観光知識・技能を身につけてからインターンシップの実習にかかる必要がある。それには、現地の大学との提携関係が必要である。

現地大学と提携を結んで、そこで現地の言葉を修得しながらインターンに行くのであれば、学生の宿泊代金の少額化にも役に立つであろう。それは学生の海外留学の際、提携大学の学生寮を利用させてもらうための利点である。

最後に、今回のインタビュー実施に協力を頂いた日本、中国の大学関係者の方々に、深く御礼を申し上げる次第である。文教大学と提携・連絡関係にある大学だけに、大変入念なご準備や資料の用意、また丁寧な説明を頂いた。インタビューの際には、日本語に堪能な先生がおられる場合は日本語で、またそれ以外は中国語、英語で会話を実施した。多くの関係する教職員の方がインタビューの場に出席して下さいました学院もあり、ご厚志には有難い限りである。またインタビュー内容の研究論文による公開も認めて頂いている。厚く御礼を申し上げます。

また、本学越谷校舎・湘南校舎の国際交流室の方々には、提携・連絡関係の大学、そのご担当の教員、部門などの紹介を頂いたことを御礼申し上げます。中国でのインタビューに際しては、また先方から頂いた中国語資料の分析に際しては、中国語に堪能な教員(今回は丸山先生)の貢献が不可欠であった。

(参考資料)

1. 亜細亜大学「大連留学・ビジネスインターンシップ報告書～2010年度「アジア夢カレッジ」大連留学・ビジネスインターンシップ～」2011年7月
2. 中国訪問先4大学の資料

以上